

に認められた。対照群に比べて有意な奇形発生率を示したのは forskolin 10m mol 以上を投与した各群であり、最も多く認められた奇形は左第4大動脈弓遺残であった。そのほかに観察された大動脈弓奇形としては右第3弓欠損、心内奇形としては心室中隔欠損であった。

結論：以上の結果より、forskolin は鶏胚に心血管奇形、とくに大動脈弓奇形を誘発させることが示された。これらの心血管奇形の発生機序の一つに cAMP の関与が考えられた。

4. 輸血部における ATLA 抗体の検索

(輸血部) 長田 広司・田中 茂治・
藤原 ムチ・清水 勝

輸血部では本年1月より院内供血者ならびに当院の患者について ATLA 抗体の検査を施行しているが、今回 ATLA 抗体陽性率の検討を行なったので報告する。

方法：スクリーニングとしてゼラチン凝集法と EIA 法を用い、確認は MT-II cell line 由来の ATLA (ATL 関連抗原) を用いての western blot 法で行なった。

結果：昭和61年1月から9月までの供血者5,712名、HB 検査依頼患者(1年から7月まで)7,329名を対象とした。供血者5,712名中 ATLA 抗体陽性者は24名(0.42%)でそのうち endemic area の出身者は10名(42%)であった。24名の抗体陽性者は全員輸血歴はなかった。諸種疾患患者の ATLA 抗体陽性率は、腎疾患3.4%、心疾患1.8%、脳神経外科疾患2.1%、婦人科疾患2.0%、整形外科疾患4.6%、血液疾患(このうち ATL 3名)19%であった。腎・心・血液疾患患者で抗体陽性者では各々81%、33%、100%が輸血歴を有していた。これら輸血歴のある患者は輸血により ATLA 抗体陽性を示したものと推定される。また ATLA 抗体陽性患者のうち2例の家族内感染が明らかになった。いずれも抗体陽性者は血液疾患患者で母親であるが、子供も検索したところ抗体が陽性であった。子供達には輸血歴はなく、おそらく乳による母子感染と考えられる。神経内科から検索を依頼された歩行障害を主症状とする特異な Myelopathy の患者の血清、髄液の ATLA 抗体はともに陽性であった。Western blot 法で特異な band がみられ、この症例はいわゆる HAM (HTLV-I associated myelo pathy) 症例と考えられる。次に輸血により感染することから HBV 感染との関連をみてみた。HBs 抗原抗体の陽性、陰性例

と ATLA 抗体陽性例については有意差は認められなかった。今後は ATLA 抗体のうち IgM 抗体陽性(感染後初期に出現してくる抗体)例での検討を進めていく予定である。

5. 舌に発生した神経線維腫の1例

(第2病院 歯科口腔外科)

○当問 裕・鎌形 有祐・
加藤 弘文・岡 光夫

(第2病院 中央検査科) 藤林真理子

神経線維腫は、顎口腔領域において比較的多発な疾患であり、その報告例の大半は Von Recklinghausen 病の部分症状としてみられたものである。

最近わたくしどもは、舌に発生した単発性の神経線維腫と考えられる症例を経験したので報告する。

患者：49歳、女性。

初診：昭和58年2月22日。

主訴：左側舌縁部の腫瘍。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

現病歴：昭和57年9月、左側舌縁部の腫瘍に気付いたが、疼痛・機能障害等は認めず放置していた。昭和58年2月、咽頭痛を主訴として当院耳鼻科に受診、その時左側舌縁部の腫瘍を指摘され、歯牙との関係について精査のため当科へ紹介された。

現症：体格栄養中等度で、全身皮膚・骨格等に異常は認められない。

口腔内所見：左側舌縁部に健康粘膜に被われた表面滑沢な拇指頭大の腫瘍が認められた。腫瘍は弾性軟で、圧痛はなく、境界は比較的明瞭であった。

処置および経過：術前生検の結果、良性腫瘍の診断を得たので、昭和58年5月17日、全身麻酔下にて腫瘍を摘出した。術後経過は良好で、機能障害・神経麻痺等は認めない。

摘出物所見：摘出物は、大きさ約22×16×8(mm)、湿潤重量約1.5gの表面滑沢な淡紅色を呈する弾性軟の腫瘍で、中央部はくびれていた。また、剖面は灰白色均質の充実性で中心部に近い一部に赤色部分を認めた。病理組織学的には、Schwann細胞と線維芽細胞が粘液性基質を伴って増生しており、らせん状を呈する膠原線維の増生を伴っていた。また、腫瘍内には肥満細胞も散見された。Schwann細胞と思われる紡錘形細胞は、酵素抗体法でS100蛋白、NSEが陽性で神経原性であることが裏付けられ、神経線維腫と診断された。